

# 草の芽句会だより

NO,110,  
17,10,5

屈み見るぬす人萩の花小さし  
園児らに鉄砲狭間見せ秋の城

範子

和やかにいつもの顔ぶれ青みかん  
秋麗杖をたよりの城吟行

節子

知らぬ間に盗人萩を道づれに  
築城の記念イベント空は秋

純子

二の門の家紋の並び秋高し  
萩叢の株ごと揺れる風強し

貞子

後ろより萩の風受け濠に向く  
白萩の触れればばらりと散りにけり

禮子

歩を止めて風を楽しむ萩の庭  
露けしや思い出遠くなるばかり

剋子

スーパーで独りの月見団子買う  
花の名も忘れがちなる老の秋

貞

出席者 氏家 吉崎 森 川原 馬場 小山  
投句者 真鍋



秋晴れの空の下、大手門広場では菊花展の準備が始まっていた。  
出展者にとってお城の展示会は、大勢の人の目に触れるため力が入ると聞いている。今年も賞をとった力作がたくさん並ぶのではと期待が膨らむ。風が強いので今日は天主までは上らずに下の道を萩園へ向う。うるし林の桜がうつすらと色付き、広場にはもう葉ボタンがぎつしりと植えられている。萩は花を終えていた、白萩が一株だけ残って咲いている。まるで私達を待っていてくれたみたい。しじみ蝶が萩叢を樂しげに出たり入ったり。雑木林ではカサコソと落ち葉する音。そして風の中に金木犀が匂っている。城山の秋の風情を楽しみながらも温かいお茶が飲みたくなり帰途についていた。